

ソーシャルネットワークの構築が進路意識に 与える影響：「高校生のキャリア意識調 査」の分析

八幡, 成美 / 下村, 英雄 / 田澤, 実 / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

134

(発行年 / Year)

2010-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007574>

ソーシャルネットワークの構築が進路意識に与える影響

—「高校生のキャリア意識調査」の分析—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

法政大学キャリアデザイン学部教授 八幡 成美

労働政策研究・研修機構研究員 下村 英雄

法政大学キャリアデザイン学部助教 田澤 実

1. 問題の所在

1990年代以降、産業構造の急激な変化や雇用の多様化・流動化によって職業キャリアの不透明性が高まっている。これから職業キャリアの選択を行う若年者にとっては、職業キャリアの将来展望を描き難い時代であろう。また、1990年代以降の景気後退だけでなく、それと同時に日本企業の雇用慣行の特質であった「長期雇用」や「新規学卒採用」が揺らぎはじめている。部分的ではあるが、学校による選抜機能や企業の人材育成機能が低下しているⁱ。結果的に、多様化や流動化によって一見すると選択肢の数は増えたのだが、その一つ一つの選択肢の確実性は低下しているのである。

将来選択の難易度が増せば、選択する力を学ぶ教育が求められる。若年者に対するキャリア教育とは、若年者のキャリア選択の能力を高め、選択行動の支援をする新しい進路指導と言えよう。そのキャリア教育の必要性が、学校、政府、企業において叫ばれているⁱⁱ。キャリア教育の具体的実践としては、インターンシップ、職場見学、およびボランティア活動参加などの学校以外の社会経験があげられるⁱⁱⁱ。

しかし、若年者就業に対する数多くの課題は指摘され、具体的な実践が報告されても、実際に若年者がどのような将来展望を持っているのか、そして職業や進路に関してどのような悩みを抱えているかに関して実態把握が進んでいるとは言えない。

つまり、キャリア教育の効果という理想が前のめりに語られ過ぎており、若年者の生活と意識に対する素朴な問いと記述的な答えが不足しているのである。

したがって本稿では、高校生の学生生活と就業・進路意識の関係を把握することを第一の目的とした。ここで分析する学生生活とは、学校内での活動だけではなく、学校以外の家族や地域における関係や友人との関係も含まれる。とくに高校生が構築しているソーシャルネットワークに関しては詳しい調査を行い、その実態とソーシャルネットワークが高校生の意識に与える影響を検証したい。

つづく第2節では、ソーシャルネットワークの性質と効果を考察し、若年者就業における先行調査の結果を紹介する。第3節では、本稿で扱う調査データを説明する。第4節では、記述統計量から高校生の意識と学生生活を把握する。第5節では、ソーシャルネットワークの構築が高校生の就業意識と進路意識に与える影響を推定する。第6節は、論文のまとめである。

2. ソーシャルネットワークの性質と効果

ソーシャルネットワークに関しては、すでにPutnam (2000) と Granovetter (1973,1995) などによる先駆的な研究がある^{iv}。Putnam (2000)

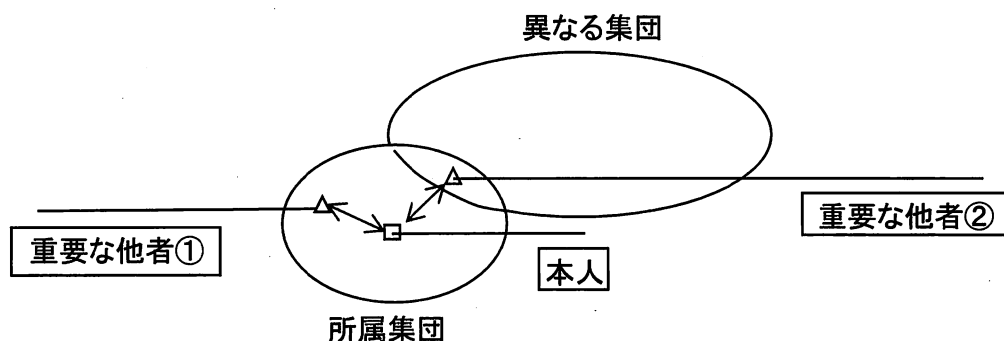
によれば、ソーシャルネットワークの構築は人々の間に相互扶助関係、協働関係、信頼関係をつくれるかどうかに影響を与える。すなわち、ソーシャルネットワークの獲得とは、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）の有無を意味しており、社会関係資本を獲得できるかどうかは、その後の意識形成や行動にも影響を与えている。一方、Granovetter (1995) は、就職市場におけるソーシャルネットワークの情報伝達機能を考察し、家族や職場同僚などの日常的にも会う頻度が高くなる強い紐帯よりも、普段は頻繁に出会わない人との弱い紐帯の方が就職に対して希少な情報が得られることを検証した。

ソーシャルネットワークには複数の機能があり、それぞれの機能に関して実証研究が蓄積されているが、本稿ではソーシャルネットワークの学習機能の側面を重視したい^v。すなわち、ソーシャルネットワークは「学校教育や文書情報収集とは異なる、他者とのコミュニケーションを通して新しい価値や情報を会おうきっかけを与えるもの」と考える^{vi}。そもそも若年者は、成人と比べると

ソーシャルネットワークの範囲も狭くその種類も一樣なので、ソーシャルネットワークの構築による学習体験の増加は重要だと考えられる。子供は、家族集団－遊技集団－隣人集団－地域集団－学校集団の順序で所属する通過集団を広げて社会化されていくが（住田,1999）、若年者も同じように徐々に所属集団を拡大しながら成長すると言えよう。

では、その成長のきっかけはどのように生まれるのであろうか。その所属集団を広げる役割を果たすのが、未知なる集団に属する「重要な他者」（工藤,2001）である。ソーシャルネットワークの広がり対話による意識の深まりを概念化したのが、図1である。自分の所属している集団内でのソーシャルネットワーク（他者①との交流）も重要であるが、異なる集団との接点となる他者②の方が本人の価値観を広げるきっかけになると考えられる。高校生のように所属集団内（この場合は学校）の同質性が高い場合、「重要な他者」とは所属集団以外の集団に属する「異質な他者」と言えるかもしれない。

図1：ソーシャルネットワークによる価値観の広がり



なお、個人が獲得しているソーシャルネットワークを測るのは難しいが^{vii}、いくつかの測定指標が考えられる。まず、友人・知人の人数（量）があげられる。しかし、量だけでは「重要性」や「異質性」を測ることはできない。それゆえ、実際にコミュニケーションをとる回数（密度）、心

理的重要度（大切さ）、さらには本人との文化的、世代的、組織的な距離（異質性）を測る必要がある。

次に、ソーシャルネットワーク構築の観点から若年者の就業意識と就業行動を取り上げた実証研究を紹介しよう。ソーシャルネットワークの重要

性は、若年無業者の研究において指摘されてきた。玄田・曲沼（2004）は、無業者は狭いソーシャルネットワークしか構築できていない事実を指摘している。また下村・堀（2004）は、大学生の就職活動期における情報探索行動を分析し、OB/OG というソーシャルネットワークの優位性を確認している。

他方、堀（2004）は、無業者・フリーターに対してヒアリング調査を行い、10名の事例からソーシャルネットワークと就業の関係を動態的に把握している。堀（2004）によれば、無業者のソーシャルネットワークは、家族以外の人間関係がほとんどない「孤立型」、地元の同年齢で構成された人間関係に所属する「限定型」、人間関係を広げていく志向が強い「拡大型」に分けられ、無業の若者は「孤立型」と「限定型」が多いことを指摘した。また、内田（2007）は、高校三年生に対するアンケート調査から限定されたソーシャルネットワークが職業選択に与える影響を検証し、安定的なホワイトカラーの大人とのネットワークを構築している高校生よりも不安定就労のブルーカラーの大人とのネットワークを構築している高校生のフリーター選択確率は高いことを発見した。さらに樋口（2006）は、ソーシャルネットワークの重要性を指摘しつつも、ソーシャルネットワークが社会移動への有益な効果を持たないことを検証した。これらの研究は、若年者のソーシャルネットワークの閉鎖性に焦点を当て、希少な情報からの遮断が就業を妨げ、その結果としてさらなるソーシャルネットワークの閉鎖性を生むという悪循環を検討している^{viii}。

くわえて、ソーシャルネットワークは若者の意識にも影響を与えている。久木元（2007）は、ソーシャルネットワークによる相談可能性を検証し、雇用形態は若者の相談ネットワークの数に影響を与え、相談ネットワークの数は若者の結婚意識にも影響を与える可能性を検討している。工藤（2001）は、本研究と同じく高校生のソーシャルネットワークに分析の焦点を当て、ソーシャルネットワークの違いが規範同調的意識や自律的な

意識に与える影響を検証している。また望月（2007）は、高校生の入学校選択に対する他者の影響を調べ、受験校の選択には、学校・仲間環境が大きな影響を与えており、実際の入学校選択に対しては家庭環境が影響を与えていることを検証している。ただし、望月（2007）の調査は、ある大学に入学した大学生に進路選択時を振り返ってもらっているため、進路選択時、もしくは進路選択前に調査票が配布されていないという限界はある。

本稿は、先行研究の成果をふまえて、高校生の生活と意識調査を行った。とくに、工藤（2001）や望月（2007）で指摘されている「他者の影響」に分析焦点をあて、それらの形成過程も把握したい。そのうえ、高校生が構築しているソーシャルネットワークの微細な差異に焦点を当てつつ、ソーシャルネットワークと就業・進路意識との関係を検証したい。

3. データの紹介

本節では、本研究で使用するデータセットを説明する。使用するデータは、高校3校に通学する1, 2年生に対して実施された「高校生のキャリア意識調査」(2007年3月実施、サンプル数2224)である。授業中に配布・回収されたので、サンプルバイアスはほとんどなく、かぎりなく悉皆調査に近いと言えよう。

調査対象の特徴としては、この3つの高校はある一大学の付属高校であることがあげられる。2高校は男子校であり、1校は女子校である（男子生徒73.2%、女子生徒、26.8%）。附属高校の大学進学率ほぼ100%であり、余程のことがなければ同じ学校法人の大学に進学できる。その意味では、就職か進学かを悩む学生は少なく、受験勉強をしながら進学先に悩む学生も少ないといえる。

しかし付属高校生は、目前の受験に対する不安が緩和される分だけ、将来の長期的展望に関しては深く考える可能性もある。また、学部選択には成績が反映されるので、将来の職業希望、学問へ

の興味関心などを考えながら学部選びを行っているとも言える。他の高校とは状況が大きく異なるが、先行研究で附属高校が取り上げられなかったことを考えると、新しい事例分析を追加する意味はあろう。

4. 記述統計による観察

本節では、記述統計量から高校生の将来展望と学生生活をできるだけ正確に把握しよう。将来の希望、職業や進路に関する悩み、ソーシャルネットワークの順序で分析結果を紹介する。

4-1 将来の希望

将来の希望進路に関しては、約 91% の学生が大学進学を希望している（表 1 参照）。複数回答可で質問した関心を集める業種は、教育（約 22%）

とマスコミ（約 19%）銀行（約 15%）が高い割合である（表 2 参照）。教育に関心を集めるのは、高校生にとって身近な大人が教師であり、高校生の現時点での関心が教育を受けることだからかもしれない。マスコミに対する関心が高いのは人気業種として当然とも言えるが、その一方で銀行や政府系機関・公団も高い値を示すので、将来の志向性はいくつかのタイプに分けられる。

表 1：進路希望先

	標本数	割合 (%)
大学進学	2020	90.83
専門学校進学	27	1.21
就職	5	0.22
その他	24	1.08
未定	127	5.71
無回答	21	0.94
Total	2,224	100

表 2：就職したい業種

業種	割合 (%)	業種	割合 (%)	業種	割合 (%)
食品	8.8	造船	0.9	損保	0.9
建設	10.3	自動車	6.7	生保	1.5
住宅	4.6	精密機械	4.5	不動産	3.9
科学	6.1	諸工業	0.5	運輸	2.6
医薬品	9.1	輸送用機器	0.8	サービス	11.4
化粧品	7.6	その他のメーカー	3.6	ソフトウェア・情報処理	7.2
ゴム	1.6	印刷	1.5	旅行	12.5
セメント・セラミックス	0.8	総合商社	5.4	航空	13.8
鉄鋼	1.2	専門商社	3.3	マスコミ	19.3
非鉄金属	0.9	アパレル	8	出版	10.4
金属製品	1.8	流通・百貨店	4.7	広告	11.4
機械	6	金融	10.6	通信	3.6
プラントエンジニアリング	0.6	銀行	15.2	教育	22.3
電力・エネルギー	3.1	クレジット	1.2	シンクタンク・コンサルタント	1.9
電子・電気機器	7.3	リース	0.4	政府系機関・公団	11.1
重工業	1.3	保険	3.8	この中にはない	14.7
				無回答	4.9

4-2 進路に関する悩み

進路についての悩みに関しては、「自分がどんな仕事に向いているのかわからない」「進路について悩む」「進路について相談する相手がいない」という質問項目を使う。表3は、4件法それぞれの割合を示した（1 とても感じた～4 全然感じなかった）。仕事に関しては、とても感じたと答

えた高校生は約40%、少し感じたが約36%であり、高い値である。進路に関しても、とても感じたが約49%、少し感じたが約31%であり、高い値である。一方、進路について相談する相手に関しては、とても感じたが約12%、少し感じたが約25%であり、それほど高い割合ではない。相談相手がいる学生は多いが、それでも悩んでいる学生が多いといえる。

表3：進路に関する悩み

	仕事に向いているかわからない		進路について迷う		進路について相談する相手がいない	
	サンプル数	割合 (%)	サンプル数	割合 (%)	サンプル数	割合 (%)
とても感じた	881	39.61	1,081	48.61	266	11.96
少し感じた	801	36.02	697	31.34	556	25.00
あまり感じなかった	351	15.78	255	11.47	853	38.35
全然感じなかった	163	7.33	160	7.19	513	23.07
無回答	28	1.26	31	1.39	36	1.62
Total	2,224	100	2,224	100	2,224	100

4-3 ソーシャルネットワークの実態

ソーシャルネットワークの構築に関しては、その量と質を区別して分析しよう。また、1年生と2年生の回答を比較することで、1年間の人間関係の広がりを見推測する。

まず、友達の量に関しては毎日話す人数（学

内、学外）と携帯で頻繁にメールをする人数と登録人数を調べた。表4を見ると、高校生の日常の人間関係が量的に把握できる。ただし、頻繁にメールする人数は単にソーシャルネットワークの量を測っているわけではなく、友人・知人との親密度という質的情報でもある。

表4：友人の数

質問	学年	平均	標準偏差	サンプル数
学校内で話す人数	1年生	17.08	13.10	1032
	2年生	16.43	14.79	961
学校外で話す人数	1年生	5.17	8.87	1032
	2年生	4.57	8.50	961
頻繁にメールする人数	1年生	5.72	6.07	1032
	2年生	4.82	6.38	961
登録人数	1年生	99.68	73.28	1032
	2年生	109.02	74.89	961

注目すべきは、携帯の平均登録人数が1年生で100人、2年生で109人と多いのだが、実際に頻繁にメールをする平均人数は1年生で6人、2年生5人で意外と少ない。幅広く浅い付き合いと少数の密な付き合いが同居しているといえる。なお、携帯登録の微増しているのは、携帯電話は過去の人間関係の保存機能を持つと考えれば、自然な増加といえる。

ところで、1年生と2年生を比較して、ほとんど格差を発見できないので（むしろ1年生の方が付き合いの量は多い）、高校生が日常的につきあう人数は一定であると考えるべきであろう。つまり、高校生は自分の所属集団内の一つのグループ内の人間関係で充足している可能性が高く、他集団との人間関係は少ない。ただし、標準偏差を見ればわかるように付き合いの個人差は大きい。広い人間関係を持つ学生と狭い人間関係を持つ学生が存在する。

次に、ソーシャルネットワークの質に関する質問項目を調べよう。今回のアンケート調査では、親友の有無と年上の人と話す機会を聞いている。

高校生にとって進路などの相談ができる親友の存在は重要であろうし、若年者にとっては年上の人と話す機会から刺激を受けると考えられる。表5をみると、親友がいるという回答は、1年生で66%、2年生で65%であり高い数値である。その一方で、わからないという答えも一定数いる。他方、「目上の人と話す機会が多い」という回答と「ある」という回答を合わせると、1年生で75%、2年生で68%である（表6参照）。量に関する質問と同様に、1、2年生で大きな差が確認できない。とくに年上と話す機会が1年生で多いのは、年上の中に同じ学校の先輩が含まれるからである。

表5：親友の有無

学年	親友の有無				
	いる	いない	わからない	無回答	合計
1 年生	747	62	311	15	1,135
	65.81	5.46	27.4	1.32	100
2 年生	713	66	275	35	1,089
	65.47	6.06	25.25	3.21	100
合計	1,460	128	586	50	2,224
割合	65.65	5.76	26.35	2.25	100

表6：目上の人と話す機会

目上の人と話す機会						
学年	話す機会が多い	話す機会はある	話す機会はない	話す機会はほとんどない	無回答	Total
1 年生	371	479.0	172	83	30	1,135
	32.69	42.20	15.15	7.31	2.64	100
2 年生	306	436	187	128	32	1,089
	28.10	40.04	17.17	11.75	2.94	100
合計	677	915	359	211	62	2,224
割合	30.44	41.14	16.14	9.49	2.79	100

つづけて、表7と表8から具体的な相談相手と話し相手を確認しよう。悩み事の相談相手として多い順にあげると、母親（約26%）、部活の友達（約24%）、クラスの友達（約20%）、その他の友人（約18%）と続く。高校生にとって身近な人が相談相手になっていることがわかる（表7参照）。日頃よく話す年上の方は、高校の部活の先輩が飛び抜けており、親戚のおじさん、おばさんが続く（表8参照）。この結果も、高校生の一般的な人間関係の一側面といえるが、その一方で、友人の親、親の友人、地元の幼なじみの先輩、趣味を通じて知り合った大人という人を介した人間関係の広がりを手に行っている高校生もいることに留意すべきである。

表7：相談者

相談者	割合（%）
母親	26.44
部活の友達	23.97
クラスの友達	20.10
その他の友人	17.85
悩みを相談する人がいない	17.04
恋人・異性の友人	7.64
兄弟・姉妹	7.19
幼なじみ	6.88
父親	6.29
その他	4.90
無回答	3.64
部活の先輩	3.42
教師	1.48
祖父・祖母	0.76
親戚	0.58

表8：目上の人

	よく話をする	たまに話をする	あまり話をしない	全く話をしない	無回答
高校の部活の先輩	27.1	28.1	12.2	27.3	5.3
親戚のおじさん、おばさん	9.9	10.8	11.2	59.0	9.1
友人の親	8.5	5.8	7.3	71.3	7.1
親の友人	7.7	7.1	7.7	70.5	7.1
地元の幼なじみの先輩	6.7	23.6	23.6	39.9	6.2
趣味を通じて知り合った大人	6.3	15.4	17.6	54.0	6.7
部活以外の高校の先輩	5.8	18.0	23.3	46.2	6.7
兄姉の友人	5.7	18.4	22.0	47.3	6.6
アルバイト先で知り合った先輩	5.6	12.2	18.6	57.3	6.3
アルバイト先で知り合った大人	5.0	10.5	17.3	60.0	7.1
地元の地域活動で知り合った先輩	3.9	6.5	12.9	69.6	7.1
地元の地域活動で知り合った大人	3.6	7.1	12.5	69.7	7.1
地元のボランティアで知り合った大人	2.9	4.4	10.4	74.8	7.5
地元のボランティアで知り合った先輩	2.0	3.6	11.0	76.0	7.4

表9には、親友の有無を区別して携帯登録人数、学内で話す人数、および学外で話す人数の平均を計算した値を示した。どの人数の平均値をとっても、親友いる > わからない > 親友いないという順番であるので、ソーシャルネットワー

クの量と質は相関していることがわかる。量と質は同時決定と考えることもできるし、量を増やすことが親友を増やす結果につながると解釈することもできる。

表9：友人関係の量と質

	携帯登録人数			学内で話す人数			学外で話す人数		
	サンプル数	平均	標準偏差	サンプル数	平均	標準偏差	サンプル数	平均	標準偏差
親友いる	1415	112.32	78.07	1418	17.71	14.12	1388	5.29	8.84
親友いない	118	84.92	121.02	123	12.47	14.98	120	4.73	13.18
分からない	541	102.40	118.26	554	16.12	15.81	545	5.30	13.47

5. 就業・進路意識に与える影響

5-1 推定モデルの説明

本節では、ソーシャルネットワークが高校生の就業意識に与える影響を推定しよう。「自分がどんな仕事に向いているのかわからない」と「進路について悩む」という質問項目を被説明変数にする。2つの質問は、「1 とても感じた、2 少し感じた、3 あまり感じなかった、4 全然感じなかった」の順序がある選択肢なので、推定には順序プロビット・モデルを採用する。4に近づければ進路や就業に関する悩みは減り、1に近づけば悩みは増える。

つづいて説明変数を説明しよう。はじめに説明変数のリストをあげて、その後で就業意識と進路意識に対する効果を推測する。

学内で話す人数：

学外で話す人数：

頻繁にメールする人数：

携帯登録人数：

親友の有無：

(0 いる 1 いない 2 わからない)

目上の人と話す機会：

(0 多い 1 ある 2 ない 3 ほとんどない)

学業成績：

(0 上 1 やや上 2 真ん中 3 やや下 4 下)

性別：(0 男 1 女)

学年：(0 1年生、1 2年生)

毎日話す人数 (学内) と毎日話す人数 (学外)、

さらに携帯登録人数はソーシャルネットワークの量を測っている。対話の数は就業・進路意識に対して正で有意な値をとると推測できる。

また、ソーシャルネットワークの質に関する質問も説明変数に加えた。携帯で頻繁にメールをする人数は、単に友人の数だけではなく対話の密度を測った変数であり、密度が高まれば就業意識や進路意識にも正の効果を与えると推測できる。さらに親友の有無と目上の人と話す機会に関する質問は、それぞれソーシャルネットワークの深さと異質性を測った説明変数である。親友との深い付き合いや年上の人と話す経験は仕事への向き不向きや進路の見通しを気付かせると考えられる。「親友がいる」と「目上の人と話す機会がある」を基準したダミー変数を作成したので、負の値をとると推測される。

その他、ソーシャルネットワーク以外の説明変数としては学校成績を加えた。成績が高いほど将来の見通しも明るくなると考えられるので、正の効果を持つと推測できる。さらに、コントロール変数として属性に関する性別と学年も説明変数とした。

なお、推定は、すべての説明変数を投入して推定を行った後、ステップワイズ法によって説明変数を絞り込むという順序で行っている^{ix}。2つの推定式の分析結果を比較しながら解釈を行う。

5-2 推定結果とその解釈

表10に示したのは推定結果である。まず、仕事の向き不向きに対する推定結果をみると、ソーシャルネットワークの量に関する説明変数は有意な結果を得られていない。ソーシャルネットワー

クの質に関する説明変数としては、携帯で頻繁にメールをする人数、親友の有無、目上の人と話すことが有意な結果を得られた。頻繁にメールする人がおり、親友と呼べる人がおり、目上の人と話す機

会が多いほど、仕事の向き不向きに悩んでいない（言い換えれば、向き不向きを理解している）といえる。

表 10：ソーシャルネットワークの効果

	仕事の向き不向き				進路について			
	係数	P> z	係数	P> z	係数	P> z	係数	P> z
学内で話す人数	0.0011	0.710			-0.0038	0.196		
学外で話す人数	-0.0001	0.979			0.0119	0.016**	0.0091	0.028*
頻繁メール人数	0.0109	0.077*	0.0133	0.01***	0.0072	0.237		
メール登録人数	0.0003	0.539			-0.0005	0.345		
親友いない	-0.4910	0.002***	-0.4885	0.002***	-0.3203	0.048**	-0.2833	0.072*
親友わからない	-0.2383	0.003***	-0.2320	0.004***	-0.0675	0.410		
目上の人話す	0.0054	0.948			0.1509	0.076*		
あまり話さない	-0.2033	0.063*	-0.2208	0.023**	0.1261	0.253		
ほとんど話さない	-0.2156	0.142	-0.2438	0.074*	-0.0452	0.762		
成績やや上	0.0912	0.573			-0.0976	0.556	-0.1600	0.099*
成績真ん中	0.1742	0.241			0.0609	0.688		
成績やや下	0.1748	0.281			0.0825	0.618		
成績下	0.2028	0.198			0.1135	0.479		
性別ダミー	-0.0905	0.306			-0.3830	0.000***	-0.3778	0.000***
学年ダミー	-0.0437	0.544			-0.1113	0.132	-0.1254	0.084*
Number of obs		983		983		983		983
LR chi2(15)		39.64		35.57		41.16		32.33
Prob> chi2		0.0005		0		0.0003		0
Pseudo R2		0.0164		0.0147		0.018		0.0141
Log likelihood		-1188.762		-1190.7924		-1125.6677		-1130.0863

***1%の有意水準、**5%の有意水準、* 10%有意水準

次に、進路意識に対する推定結果をみると、学外で話す人数が正の効果を持って有意である。学外の人と話す機会が多いほど進路に関する悩みは少なくなるといえる。また、親友がいる人よりいない人の方が進路意識に対して負の効果を持つことがわかる。目上の人に関する変数は、ステップワイズ法によって変数選択をすると排除されてしまう。要するに、進路意識に関しては、ソーシャルネットワークの量と質がそれぞれ影響を与えているが、学内友人や携帯登録人数では統計的に有意な結果を得られなかった。なお、成績の一

部変数と性別も有意な値を得られた。

以上より、ソーシャルネットワークの効果を統計的に分析した場合、ネットワークの広がりよりもその深さや異質性の方が高校生の就業・進路意識、とくに就業意識に正の影響を与えていることがわかる。ソーシャルネットワークの量よりも質の影響が大きく、対話の数よりも対話の密度、「同質な他者」よりも「異質な他者」との交流が将来の意識、特に就業意識を高めるという関係が読み取れる。

くわえて、ソーシャルネットワークの質的側面

の重要性を分析するために、相談相手の有無を決める要因を推定したい。被説明変数は、「進路について相談する相手がいない」（1 とても感じた

～4 全然感じなかった）であり、説明変数は先ほどの二つの推定式と同じである。

表 11：相談相手の有無

	相談相手の有無			
	係数	P> z	係数	P> z
学内で話す人数	-0.0007	0.794		
学外で話す人数	0.0031	0.511		
頻繁メール人数	0.0102	0.091*		
メール登録人数	-0.0008	0.097*		
親友いない	-0.2721	0.066*	-0.2538	0.146
親友わからない	-0.2590	0.001***	-0.2685	0.077*
目上の人話す	-0.0134	0.868		
あまり話さない	-0.1633	0.120		
ほとんど話さない	-0.0584	0.674		
成績やや上	-0.1497	0.336		
成績真ん中	-0.0128	0.928		
成績やや下	-0.0597	0.703		
成績下	-0.1660	0.274		
性別グミー	0.1346	0.118		
学年グミー	0.0101	0.885		
Number of obs		983		983
LR chi2(15)		26.35		13.73
Prob> chi2		0.0345		0.001
Pseudo R2		0.0103		0.0054
Log likelihood		-1265.87		-1272.18

***1%の有意水準、**5%の有意水準、* 10%有意水準

表 11 に示された分析結果にみれば、親友のわからない（変数選択前は、親友いない）が有意で負の値である。つまり、進路について親友がいれば、相談相手について悩むことは少ないといえる。また、変数選択前の推定では、頻繁にメールする人数は正で有意な値であり、携帯登録人数は有意であったが、推測と異なり負の値であった。なお、ソーシャルネットワークの量に関する説明変数は有意な結果を得られていない。友人が多いだけでは、相談相手が見つかるとは限らないといえる。

6. 結語

本稿では、高校1，2年生のアンケート調査を使って、高校生の生活実態と就業・進路意識の関係を検討した。とくに高校生のソーシャルネットワークについて詳しく調査した。分析から明らかになったことは以下の3点である。

- (1) 高校生のソーシャルネットワークは、同じ学校や同年代友人を中心に形成されており、成人と比べると狭い人間関係の中にある。しかし、その個人差は大きく、一人の高校生であっても浅く広い付き合い合

いと深く狭い付き合いが同居している。

- (2) 1年生と2年生を比較した場合、ソーシャルネットワークの量も質も大きな違いがなかった。高校生は自分の所属集団内の一つのグループ内の人間関係で充足している可能性が高く、他集団との人間関係は少ない。言い換えれば、他集団との交流をもたらす「重要な他者」の存在の重要性は増すのである。
- (3) 高校生の職業意識と進路意識を被説明変数とした推定を行った結果、ソーシャルネットワークの量よりもその質、具体的には密度と深さと異質性が正の影響を持つことが検証された。「同質な他者」よりも「異質な他者」との深い交流が将来の意識、特に就業意識を高めるという関係が解釈できる。

以上の分析結果は、高校生を対象としたキャリア教育に貴重な示唆を与えてくれる。キャリア教育は、インターンシップ、職場見学、およびボランティア活動参加などの学校以外の社会経験を目的とした実践が多いが、その経験とは単なるソーシャルネットワークの量的な広がりではなく、「重要な他者」＝「異質な他者」との出会いになるような工夫が必要であろう。くわえて、すでに少数の高校生は学校以外の場所で「重要な他者」とのネットワークを持っている。学校側は、高校生の学外活動を把握しつつ、ソーシャルネットワークの質的充実に対する適切な支援を行うべきであろう。

本稿の分析は一つの学校法人の事例に留まる。附属高校の特殊性を明らかにするためにも、他の高校との比較が必要である。進学率、地域、普通科と職業科という高校違いを考慮すべきであろう。さらに、高校1、2年生の追跡調査を行えば、高校から大学へ移行した際の意識変化を追うことも可能であろう。今後の調査課題としたい。

参考文献

- 玄田有史・曲沼美恵 2004 ニートフリーターでもなく失業者でもなく 幻冬社。
- Granovetter, Mark 1973 The Strength of Weak Ties American Journal of Sociology, 78(6), 1360-1380.
- Granovetter, Mark 1995 Getting a Job: A Study of Contact and Careers, Chicago University of Chicago Press. (渡辺深訳 1998 転職：ネットワークとキャリアの研究 ミネルヴァ書房)
- Herminia Ibarra, Prashant H. Deshpande 2007 Networks and Identities – Reciprocal Influence on Career Processes and Outcomes In Huge Gunz, Maury Peiperl (ed.), Handbook of career studies. Sage Pubns. Pp. 268-282.
- 樋口明彦 2006 社会ネットワークとフリーター・ニート若者は社会的に排除されているのか 太郎丸博 (編) フリーターとニートの社会学 世界思想社 Pp. 49-74.
- 本田由紀 2005 若者と仕事－「学校経由の就職」を越えて－ 東京大学出版会 pp. 25-51.
- 堀川基博 2004 職場体験プラスαの生き方学習－進路意識と人間関係能力をみがく－ 実業之日本社。
- 堀有喜衣 2004 無業の若者のソーシャルネットワークの構造と機能 日本労働研究雑誌, 533, 38-48.
- 福重清 2006 第四章 若者の友人関係はどうなっているのか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌 勁草書房 Pp. 115-147.
- 片瀬一男 2008 第五章 どのような相談ネットワークが進路選択を促進するのか－その広がり多様性－ 海野道郎・片瀬一男 (編) 〈失われた時代〉の高校生の意識 有斐閣 Pp. 143-165.
- 三村隆男 2004 キャリア教育入門－その理論と実践のために－ 実業之日本社。
- 望月由起 2007 高校生の「入学校選択」に対する他者の影響 キャリアデザイン研究, 3, 133-142.
- 金光淳 2003 社会ネットワーク分析の基礎－社会的関係資本論にむけて 勁草書房。
- 児美川孝一郎 2007 権利としてのキャリア教育 青木書店。
- 小杉礼子 2005 変わる若者労働市場 矢島正見・耳塚寛明 (編著) 変わる若者と職業世界 (第2版) 学文社 Pp. 23-88.
- 久木元真吾 2007 第三章 広がらない世界－若者の相談ネットワーク・就業・意識 堀有喜衣 (編) フリーターに滞留する若者たち 勁草書房 Pp. 129-171.
- 工藤保則 2001 第6章 高校生の相談ネットワーク－準抛人、準抛集団、社会化－ 尾嶋史章 (編著) 現代高校生の計量社会学 ミネルヴァ書房 Pp. 152-182.

Putnam, Robert 2000 *Bowling Alone : the Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster.
(柴内康文訳 2006 孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房)

下村英雄・堀洋元 2004 大学生の就職活動における情報探索行動 ―情報源の影響に関する検討― 社会心理学研究, 20(2), 93-105.

下村英雄 2008 若者の就職における自己と他者―フリーターの心的・ニートの心性を超えて 大庭健・廣石忠司・下村英雄・中村育男・内山哲朗 職業と仕事―働くって何? 専修大学出版局 Pp.97-136.

住田正樹 1999 発達・社会化・教育」住田正樹・高島秀樹・藤井美保 人間の発達と社会 福村出版 Pp.10-24.

内田龍史 2005 強い紐帯の弱さと強さ―フリーターの部落のネットワーク 部落解放・人権研究所 排除される若者たち―フリーターと不平等の再生産 解放出版社. Pp.178-199

内田龍史 2007 フリーター選択と社会的ネットワーク―高校三年生に対する進路意識調査から 理論と方法, 22(2), 139-153.

安田雪 1997 ネットワーク分析―何が行為を決定するか (ワードマップ) 新曜社.

安田雪 2001 実践ネットワーク分析―関係を解く理論と技法 新曜社.

iv ソーシャルネットワークの理論研究に関しては、安田 (1997, 2001) や金光 (2003) などが詳しい。

v Ibarra & Deshpande (2007) では、ソーシャルネットワークとキャリア形成に関する研究成果が紹介されており、研究成果を整理して次のような枠組みを提示している。

キャリアの結果としては、昇進、賃金など客観的に観測できるものと仕事の充実度やモチベーションなどの内面的な状態に分かれる。さらに、それらの結果に対するソーシャルネットワークの効果も、(1) 情報収集や仕事の割り当てのようにひとつの手段として利用される場合と (2) 心理的な過程が生み出され内面が変化する場合がある。

vi たとえば下村 (2008) は、他者との付き合いが他者との意見の相違を生み出し、他者と異なる自分の発見に繋がることを指摘している。そして、その相違に気づく経験の蓄積は若者に「確固たる自己」の確立 (大人になる) をもたらすと主張する。

vii 若者の友人関係は複雑化してきており、実態把握は難しいと言えよう。若者たちが友人関係を選択的に使い分けている実態に関しては、福重 (2006) などが詳しい。

viii その他、様々な観点からソーシャルネットワークと就業行動の関係を分析した研究が蓄積されている。内田 (2005) は、部落出身者のフリーター就業の問題を取り上げ、部落出身者は部落のネットワークという相対的強固なソーシャルネットワークに依存するがゆえに、結果的に非正規社員への就職が増えるという問題をヒアリング調査から発見している。また片瀬 (2008) は、高校生の相談ネットワークの男女比較を行い、男性に比べて女性は、多様な相談ネットワークを構築しており、なおかつ相談ネットワークの違いが就業行動に与える影響も大きいことを発見している。

ix ステップワイズ法は10%の基準で行っている。

注

- i 1990 年以降「学校経由の就職」が変化してきた実態については、本田 (2005) や小杉 (2005) などの説明が詳しい。
- ii 学校におけるキャリア教育の現状に関しては、三村 (2004) や児美川 (2007) などが参考になる。
- iii 具体的取り組みとして堀川 (2004) などをあげることができる。